

声なき声

沖縄県立那覇国際高等学校三年 東恩納 沙奈

戦後八十一年。かつて焼け野原だった沖縄の大地には草木が生い茂り、人々の笑い声がこだまする。しかし、不発弾処理や基地問題、遺骨収集の問題など、今もなおこの島に大きな傷跡を残している。私はこの現状を「性」というフィルターを通して見て、考えるようになった。

このフィルターができたのは、留学先で性被害に遭ったことがきっかけだ。散歩の帰り道、見知らぬ人から不同意でよからぬことをされた。私は何もできず、彼の機嫌を損ねないように笑顔で後退りするほかなかった。ホストファミリーは泣きじゃくる私に寄り添い共に怒ってくれた。それから被害を受けた夜になるにつれ被害妄想が激しくなり、幾度となくフラッシュバックに襲われた。数日後日本のカウンセラーと話した結果、PTSD(心的外傷後ストレス障害)の症状が出ていると診断された。平和学習で元兵士らが今もなおPTSDの後遺症に苦しめられていることを知っていたが、こんなにも苦しいとは思わなかった。

しかし、私はいつもの明るい自分でないのが、何かに取り憑かれているようで嫌だった。「負けない。誰にも同じ思いしてほしくない。」とノートに書き殴った。これが地獄を抜け出した瞬間だった。

帰国後、性教育が今後の課題だと感じ、女性センターを訪れた際、沖縄戦と性教育に関するシンポジウムを紹介された。戦後八十年というところで沖縄が開催地となったんだそう。高校生は一人だけだったが、等身大で意見を交わすことができた。そこで紹介されたのが「軍隊を許さない行動する女性たちの会」代表の高里さんだった。彼女は米軍兵による性被害に向き合い、米軍基地の撤退を訴えてきた。私は過去の沖縄戦については学んできたが、南部で過ごすことが多いがゆえ、現在の基地問題はあまり身近ではなく、ニュースで聞いたことがある程度だった。米軍から被害を受け、戦ってきた女性の話や、どんな思いで活動してきたのかを聞いた時、これほど深刻なテーマに無関心で

あった自分が恥ずかしくなった。対話の終わり際、「あんたの活動は応援しているよ。けどこのテーマは本当に難しいから頑張ってね。」

高齢のため一九九五年から続けてきた活動を引退するという彼女からの言葉は重い何かを託されたようだった。帰り際、高里さんと繋いでくれた方から、「あなたはやってくれる」という言葉と共にこの会の雑誌を受け取った。糸満市出身である私は、中学時代平和ガイドに挑戦したり、海外で沖縄戦を伝えたりと様々な経験を積んできた。それで満足していたことをこの雑誌を読んだ思い知らされた。そこには戦時中から今日に至るまでの事柄を性と平和に関して述べられていた。そこで初めて戦時中、日本兵や米兵からの性暴力が生後九ヶ月から九十一歳までの人に及んでいた事実を知った。それは性欲を発散させるためだけでなく、絶望感や無力感を与える武器でもあったそうだ。戦争は人を人で無くしてしまう。この言葉の意味を痛いほどに理解した。また戦後は基地ができたことにより周辺住民への被害が深刻だったそうだ。被害女性らは社会に守られることなく、強姦されたのち生まれできた混血の子を故郷を離れて育てたり、トラウマに苦しめられたりと被害を一生背負い続けていた。一方加害者は基地に帰れば問題ないという認識や、被害者にとって米軍であったという情報源しかないがゆえ告発することもできず、泣き寝入りすることが多かったそうだ。この話を通して私は米軍を反対したいのではなく、日米安全保障条約や日米地位協定の在り方を国が国民の人権のために整備すべきと考えた。基地に戻れば問題ないという加害者の意識を許してしまっている時点で、これらは本当に国民のためになっていないのだろうか。民主主義に乗っ取り、県民の声を聞いていると言えるのだろうか。憲法九条の平和主義に加え、第十三条の個人の尊重・幸福追求権という視点を大切にすべきと考えた。

そんな折のことだ。時雨るる空の下、私はアメリカから来た知人を連れ、平和祈念公園をガイドして周った。そこでふと平和の礎の前で立ち止まり、考えた。この名前ひとりひとりにどんな物語があるのだろうか。今の私たちに何を伝えたいのだろうか。先人たちは語りかけてくれない。

これからの沖縄の平和を担うにあたって、私は沖縄戦の影響で性被害に苦しんできた「声なき声」の代弁者になりたい。泣き寝入りした彼女たちの想いを、「性」という字に込められた「生きる」ことの意味を背負って。